

「黒田官兵衛 ～天才軍師の真実」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 播磨で名を挙げた青年期の官兵衛

「酒は呑（の）め呑め 呑むならば 日本一（ひのもといち）のこの槍（やり）
を 呑み取るほどに呑むならば これぞ真（まこと）の黒田武士」

以上は福岡県に伝わる有名な民謡「黒田節」であり、最近では私（黒田裕樹）の講演の代名詞ともなっていますが（笑）、筑前福岡藩（ちくぜんふくおかはん）の武士たちによって歌われ続けた後に、全国に広がったのがその由来です。

福岡藩の藩祖は黒田長政（くろだながまさ）ですが、一般的にはその父であり、平成26（2014）年のNHK大河ドラマの主人公であった、黒田官兵衛（くろだかんべえ）の方が有名ですね。

黒田官兵衛といえば「天才軍師」として知られていますが、戦国武将として彼はどのような人生を歩んだのでしょうか。今回は、黒田官兵衛の生涯をたどりながら、そこから導き出される様々な歴史の流れを探ってみたいと思います。

なお、黒田官兵衛の諱（いみな）は孝高（よしたか）であり、また出家後の号である「如水（じょすい）」も知られていますが、当講座では「官兵衛」で統一します。

黒田氏の出自については、「黒田家譜（くろだかふ）」などによって、近江国伊香郡黒田村（おうみのくにいかぐんくろだむら、現在の滋賀県長浜市）の佐々木黒田氏とされてきたり、あるいは赤松氏（あかまつし）の末裔（まつえい）とも言われたりしてきましたが、一次史料の裏付けがなく、不審な点が多いようです。

確実なのは、官兵衛の祖父にあたる黒田重隆（くろだしげたか）が、播磨（はりま、現在の兵庫県南部）の御着（ごちゃく）城主の小寺政職（こでらまさもと）に仕え、重隆の子の黒田職隆（くろだもとたか）が姫路城の城代となり、小寺姓を与えられ家老職となったなど、厚遇されたということでしょうか。

但し、職隆の頃の姫路城は小城でしかなく、現在のような豪壮優美（ごうそうゆうび）な城は、江戸時代初期までの改築によるものです。

いずれにせよ、黒田氏は小寺氏の重要な家臣であり、姫路に本拠を置き、その名を高めてきました。

そんな中で天文(てんぶん)15年11月29日(西暦1546年12月22日)に、官兵衛は職隆の嫡男(ちやくなん)としてこの世に生を受けたのです。

官兵衛は永禄(えいろく)4(1561)年に16歳で小寺政職(こでらまさもと)の近習(きんじゅう)として出仕すると、翌永禄5(1562)年には初陣で手柄を立てました。

その後、官兵衛は永禄10(1567)年に父の職隆(もとたか)から22歳で家督を継いで姫路城主になると、主君である政職の縁戚(えんせき)にあたる光(てる、または「みつ」と結婚し、翌永禄11(1568)年には嫡男の松寿丸(しょうじゅまる)が生まれました。後の長政です。

なお、当時の戦国武将は、子孫を残す名目もあって、側室を何人も持つのが慣例でしたが、官兵衛は生涯側室を持たず、光を愛し続けました。官兵衛によるこうした「愛情」は、後に大きな力を生み出すこととなります。

その後、永禄12(1569)年に赤松政秀(あかまつまさひで)が3,000の兵力で姫路に攻め込んできましたが、官兵衛はわずか300の兵で奇襲攻撃をかけてこれを撃退するなど、大いに名を挙げました。なお、この戦闘は「青山(あおやま)・土器山(かわらけやま)の戦い」と呼ばれています。

しかし、長かった戦国の世も、この頃までには一人の英雄の誕生によって、確実に変化を見せ始めており、それは、官兵衛が本拠とする姫路を含む播磨においても例外ではありませんでした。

2. 信長・秀吉との出会いと幽閉の日々

播磨は現在の兵庫県南部ですが、平地が少なく山がちであり、各地域がそれぞれ独立した意識を持っていました。このため、戦国の世に彗星(すいせい)のごとく現れ、天下統一に執念を燃やした織田信長(おだのぶなが)も、播磨の平定に苦勞することとなりました。

また、信長が東から播磨をうかがう一方で、西からは毛利氏(もうりし)がその影響力を伸ばそうとしており、播磨の各大名は、織田につくか毛利につくかの選択を迫られるようになっていました。

そんな中、これからの時代の流れを読んでいた官兵衛は、主君の小寺政職(こでらまさもと)を説得して天正(てんしょう)3(1575)年までに信長に臣従を誓うと、信長の家臣であった羽柴秀吉(はしばひでよし、後の豊臣秀吉=とよとみひでよし)に見いだされ、以後は秀吉に、ひいては信長に従って、播磨や中国地方の平定に奮闘しました。

信長や秀吉は官兵衛の活躍ぶりを喜びましたが、群雄が割拠する播磨の平定はやはり難しく、天正6(1578)年2月には東播磨の別所長治(べっしょながはる)が信長を裏切り、居城である三木城(みきじょう)に立てこもりました。いわゆる三木合戦の始まりです。

三木合戦によって風雲急を告げた播磨に、さらに衝撃的な知らせがもたらされました。同じ天正6(1578)年10月に、秀吉の後方支援を行っていた摂津有岡(せつつありおか)城主の荒木村重(あらかむら

いげ)が、突然信長に反旗を翻(ひるがえ)したのです。

村重の謀反(むほん)に対して、官兵衛の主君であった小寺政職(こでらまさもと)も同調しようとしたため、官兵衛は村重を説得しようとして単身で有岡城に乗り込みましたが、逆に捕えられ、城内の土牢(つちろう)に入れられてしまいました。

有岡城に出向いたまま、いつまで経っても帰ってこない官兵衛に対して、信長や秀吉は「官兵衛は裏切ったのか」と不信感を抱くようになりました。信長には人質として官兵衛の子の松寿丸を差し出しており、このままでは見せしめのために殺害される可能性がありました。

官兵衛の、いや黒田氏にとっても最大のピンチといえましたが、これらを救ったのが、普段から見せていた官兵衛の「優しさ」でした。

有岡城の狭い土牢の中に閉じ込められてしまった官兵衛でしたが、彼は決して絶望することなく、また自身の運命を呪うこともなく、いつか牢から出されるであろうことを信じて毎日を過ごしました。

そんな官兵衛のひたむきさに絆(ほだ)された世話役の加藤重徳(かとうしげのり)は、いつしか官兵衛と心を通わせるようになり、何かと便宜を図るようになりました。

また、主君が行方不明になった黒田氏においても、父である黒田職隆(くろだもとたか)を中心として家臣が一つにまとまり、絶対の忠誠を誓った「起請文(きしょうもん)」を提出するなど鉄の団結力を見せました。

こうした動きは、官兵衛が普段から周囲に気を配るなどの「優しさ」がなければ、考えられなかったことでしょう。官兵衛や彼を支えた家臣たちの願いは、天正7(1579)年10月の有岡城の落城によって叶えられたのです。

有岡城が落城した際に救出された官兵衛でしたが、その身体は骨と皮だけに瘦(や)せさらばえ、全身に皮膚病(ひふびょう)が広がり、膝(ひざ)が曲がって自力では歩行できなかつたとされています。その後、官兵衛は有馬(ありま)の湯につかって疲れをいやし、秀吉と涙の対面を果たしました。

官兵衛が救出された後、翌天正8(1580)年1月には三木城が落城し、信長は播磨平定に向けて大きく前進しました。また、牢内の世話役だった加藤重徳の次男が官兵衛の養子となって黒田一成(くろだかずしげ)と名乗り、後に黒田二十四騎(くろだにじゅうよんき)の一人として活躍することになりました。

また、起請文を書いた一人である母里友信(もりとものおぶ)も黒田二十四騎の一人となったほか、民謡「黒田節」のモデルとされるなど、現代でもその名を残しているほか、信長を裏切って出奔(しゅっぽん)した主君の小寺氏に対しても、官兵衛が後に子の氏職(うじもと)を客分として迎えるなど厚遇しました。

有岡城での幽閉(ゆうへい)は、官兵衛にとって痛恨の出来事ではありましたが、同時に家臣の鉄の団

結力など、通常では得がたい経験を積むことになりました。小寺氏の事実上の滅亡で黒田の姓に復した官兵衛は、その後も秀吉配下として信長の天下統一に貢献することとなったのですが、思わぬ運命が彼を待ち受けていました。

3. 天下平定から朝鮮出兵への道のり

播磨を平定した後、天下統一の大事業に向けて前進を続けた織田信長でしたが、家臣であった明智光秀(あけちみつひで)の裏切りにあい、天正 10 (1582) 年 6 月 2 日の本能寺の変によって倒されました。

このとき、官兵衛は秀吉とともに中国地方の備中高松城(びっちゅうたかまつじょう)の攻略の最中でした。信長の死を知って悲嘆にくれる秀吉に対して、官兵衛は以下のように言いきました。

「信長公亡き今、貴方様こそが天下を治めるべき人ですぞ」。

官兵衛が本当にそこまで考えていたかどうかは不明ですが、主君の死で激しく動揺していた秀吉が、官兵衛の一言でショック療法を受けたかのように立ち直り、その後の「中国大返し」を成功させて光秀を討ち果たし、天下取りに名乗りを上げるようになったことだけは間違いありません。

秀吉が天下取りを目指し始めると、官兵衛は時には戦場に出て陣頭指揮を取ったり、時には裏に回って調略に徹したりするなど、陰に陽に秀吉の手助けを果たし続けましたが、その背景には「少しでも兵力を損なうことなく戦争状態を脱したい」という彼の「優しさ」がありました。なお、この間の天正 13 (1585) 年頃までに、官兵衛はキリスト教に入信し、洗礼を受けています。

この後、天正 15 (1587) 年の九州平定によって豊前(ぶぜん、現在の福岡県東部並びに大分県北部) 12 万石の大名となった官兵衛は、新たな居城として、中津城の築城に取りかかりましたが、間もなく領国で起きた一揆(いっき)を無事に鎮圧すると、天正 17 (1589) 年には子の長政に 44 歳で家督を譲りました。

ただし、家督を譲ったといっても隠居したわけではなく、翌天正 18 (1590) 年の小田原攻めの際には、当主の北条氏直(ほうじょううじなお)を官兵衛自らが説得し、開城へと導きました。

官兵衛の働きによって北条氏は事実上滅亡し、同天正 18 年に豊臣秀吉はついに自らの手で天下統一を果たすこととなったのです。

我が国を統一した秀吉は、イスパニア(=スペイン)の標的となっていた明(みん)を先んじて攻める決意をし、その道案内を断った朝鮮半島へと攻め上りました。世に言う「朝鮮出兵」です。

文禄(ぶんろく)元 (1592) 年に始まった 1 回目の朝鮮出兵たる文禄の役(えき)に際し、官兵衛も軍監として渡海(とかい)しましたが、小西行長(こにしゆきなが)や石田三成(いしだみつなり)らとの確執もあって思うような采配が取れず、文禄 2 (1593) 年の帰国後に秀吉の怒りを買いましたが、官兵衛が出家し

たこともあって許されました。なお、出家の際に官兵衛は「如水円清(じょすいえんせい)」と号しています。

官兵衛の帰国後、朝鮮との間に一度は和議が成立しましたが、その後こじれたことで、慶長(けいちょう)2 (1597) 年に秀吉はふたたび朝鮮を攻めました。これを慶長の役と言います。

慶長の役において官兵衛はふたたび渡海し、釜山(プサン)の北に位置する梁山(ヤンサン)城を少数の兵で守りきるなど軍功を挙げたものの、官兵衛が帰国した後に秀吉が慶長3 (1598) 年に死去したのを理由に、日本軍は朝鮮から撤退しました。

秀吉の死によって、我が国で再び不穏な空気が漂(ただよ)い始めていましたが、時代の流れを読んでいた官兵衛は、徳川家康(とくがわいえやす)に味方する道を選びました。

4. 家康への臣従と関ヶ原以後の官兵衛

慶長5 (1600) 年9月15日に起きた関ヶ原の戦いで、家康の東軍が、石田三成率いる西軍に勝利して後の天下統一に大きく前進することになりましたが、そうした流れに貢献したのが、官兵衛の嫡男であった黒田長政でした。

家康の養女と結婚した長政は、関ヶ原の戦いにおいて切り込み隊長として西軍に猛攻を加えるなど活躍しましたが、豊前中津にいた官兵衛も、これに呼応(こおう)するかのよう、九州で様々な動きを見せました。

中津城の防衛と、自身の判断での出陣を認める旨を、家康と事前に密約していた官兵衛は、石垣原(いしがきばる)の戦いで大友義統(おおともよしむね)を破り、同じく家康に臣従した加藤清正(かとうきよまさ)と連携(れんけい)して、島津氏に攻め込む構えを見せるなど、堂々たる働きぶりを見せました。

また関ヶ原の以前に、官兵衛と長政とが西軍の有力武将であった吉川広家(きっかわひろいえ)を説得し、本戦において毛利軍が動きを見せなかったなどの功績もあって、長政は筑前52万石を擁(よう)する大大名となったのです。

なお、長政が中津城に凱旋帰国した際に、喜ぶ長政に対して官兵衛が「家康がお前の右の手を握っている間に、左の手は何をしていた。なぜ左手で家康を刺し殺さなかったのだ」と叱責したとされる話が有名ですが、これは後世の創作と考えられています。

関ヶ原の戦い後の官兵衛は、もはや政治の表舞台には登場せず、領国あるいは京都で静かな日々を過ごし、趣味の連歌(れんが)や茶の湯の世界を楽しみました。

やがて病を得た官兵衛は、慶長9年3月20日(西暦1604年4月19日)に、京都の伏見で59歳の波乱に満ちた生涯を閉じました。以下は官兵衛の辞世です。

「おもひをく 言の葉なくて つゐに行く 道はまよはじ なるにまかせて」

自分の人生にはもはや思い残すこともなく、伝えるべき言葉もない。後は道に迷うこともなく、成り行きに任せて神のもとに向かうだけであるという、キリシタン大名らしい辞世といえそうです。

官兵衛の葬儀はキリスト教式で行われた後、長政によって仏式でも挙行されました。なお、官兵衛亡き後の黒田氏は筑前 52 万石の大名として、紆余曲折(うよきよくせつ)を経ながらも、明治維新まで命脈を保つこととなりました。

黒田官兵衛と言えば「知略に満ちた名軍師」であり、またその智謀(ちぼう)は、秀吉をもって「自分の後を狙う者」とまで恐れられた、とこれまでは思われてきました。

しかし、今回の講座を通じて見えてきた官兵衛の実像は「筋を通し続けた武将」であり、彼の「優しさ」が家族に対する愛情や家臣の団結力を高め、さらには周囲の信頼を得ることによって、我が国を平和に導く役割を果たしたといえるでしょう。

また、彼は裏切られて長いあいだ土牢に閉じ込められるという苦しみを味わいましたが、その経験が彼の人間性をより高めるとともに、様々な局面における強(したた)かさ(したた)かさを備えていったとも考えられます。

戦国武将として輝かしい出世を遂げた、黒田官兵衛のサクセス・ストーリーを振り返ることによって、私たちは何をすることができるのでしょうか。

本人の「優しさ」もあって、官兵衛の周囲は夫婦や親子、あるいは兄弟などの身内はもちろん、家臣団も「鉄の団結力」を誇っていましたが、これは現代の国難に際して、国民と為政者とが「挙国一致」で取り組む姿勢へとつながります。

また、官兵衛自身が戦(いくさ)の達人であるとともに、「可能な限り兵力を損なうことなく戦争を終わらせる」ための様々な調略にも長(た)けていましたが、これらは諸外国との外交における大きな力となり得ることでしょう。

優しさや強さと共に、調略といった外交バランスにも優れ、さらには大きな挫折などの様々な体験から身につけた、内面からにじみ出る「強(したた)かさ」も同時に併せ持つ。そのような人物こそが、我が国を正しい方向へと導く為政者として相応(ふさわ)しいのではないのでしょうか。(完)

主要参考文献：「黒田官兵衛 智謀の戦国軍師」(著者：小和田哲男 出版：平凡社)

「黒田官兵衛 天下を狙った軍師の実像」(著者：諏訪勝則 出版：中央公論新社)

「歴史街道 2014年2月号」(出版：PHP 研究所)

YouTube 再生リスト「黒田官兵衛」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML7iGXXMWJQdHnY0J-CHhuyf>

黒田裕樹の歴史講座 <http://rocky96.blog10.fc2.com/>